

# 本文章已註冊DOI數位物件識別碼

## ▶ 道綱母の愛と憎しみ－「蜻蛉日記」から考察して－

doi:10.29714/TKJJ.200003.0012

淡江日本論叢, (9), 2000

作者/Author：黃淑靜

頁數/Page：213-235

出版日期/Publication Date：2000/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200003.0012>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



# airiti

## 道綱母の愛と憎しみ

—「蜻蛉日記」から考察して—

淡江大学副教授

黄淑静

### 始めに

私は「女流日記文学の源流と本質」という拙作を書き終えたとたん、「これから女流日記を絞って、研究テーマにしよう」と自分に言い聞かせた。本当はまだやっているうちに、自分が心の中にそう決めていたかもしれない。なぜならわたしは山紫水明の京都の風土に生まれた平安文学の主流である高貴、上品、優雅な美の文学理念、すなわち「あはれ」、「をかし」という美意識に魅了されたからである。それに平安時代の女流日記文学の世界に、千年程前にあんなに閉そくされた環境の中に生きていた女性の喜、怒、哀、楽にわたしも随分心を引かれた。千年ほど前の日本の女性の深層心理に触れることができるうえに、通じることでもあるのは、私の日常生活の最大の楽しみになったのである。特に夜一人でスタンドの下で、静かにこれらの書物を広げて読んでいると、あの時代に女性に生まれて来たら、だれでも反抗できない宿命的な運命を背負っていかなければならない苦しさを察すると同時に、改めて現代に自由に羽根を広げられる現代女性の楽しさを思い知らされたのである。しかし不思議なことには、こうしているうちに時空を超越してこの世にいないそれぞれ個性をもつ道綱母や紫式部らはいつの間にか、私の親しい友達になってくれたような気がしたのだ。

ある日、ある友達が「歴史を騒がせた女性たち」（文春文庫、永井路子）と言う日本篇、外国篇二冊に分かれた本を貸してくれた。まず日本篇の目録をめくっていると、「愛憎にもだえた女たち」という項目にまとめられた六大の女性の中に、和泉式部（王朝のプレイガール）と道綱母（書きまわすよマダム）が出ているのを目にしたのである。もともと和泉式部は自由奔放な生き方と情熱的な和歌とによって知られ、敦道親王との恋は世間の非難がましい好奇心をあつめるのもよく知られることであるので「王朝のプレイガール」と言われても無理もないことだと私は思う。しかし道綱母の部分を読んでいたら、何と私のイメージの中の道綱母と全く違ったような人が描かれていることに気づいたのだ。例えば「私（作者）は人間としてはどうも彼女は好きになれない。」、「北条政子の嫉妬はいかにも田舎者らしくあらっぽいが、陽気で多少ユーモラスでさえあるが、『蜻蛉日記』の作者の場合は、

陰湿ないやがらせの色が濃い」、特に『蜻蛉日記』は王朝版『夫にきらわれ方教えます』である」と断言したのに、私は驚いたのである。というのはあのいい方ではあまりにもひどすぎて、疑問が脳裏をかすめたからである。

そもそも「蜻蛉日記」の主題は、作者の道綱母の結婚生活の苦悩、その「はかなき身の上」にあると考えられている。夫の兼家の好色で絶えず不倫事件をしでかすから、その結婚生活にまつわる煩悩や悲哀の積み重なっていく出来事がありありと描き出されているので、「蜻蛉日記」の主題をだいたいこんなふうに見るのは、きわめて自然な読み取り方であろう。しかしながら記事の実際は作者の苦悩や身の上の「はかなさ」の一角に塗りつぶされているわけではなく、また叙述の構造もそれほど単純ではない。一見して「ものはかなさ」という基調が漂っていて、それを無理やり読者に与えようとしている作者の意図をまず感じざるを得なかった。読み始めてから私はいつも同じ嘆きを繰り返しているように見え、どちらかというあまり感じのよいものではなかったというのが最初の印象だった。しかしながら現代まで残る平安朝の女流日記は一つ一つが独自の発想、内容を具えた作品のなかで、女流文学の自覚された芽生えを指摘するとすれば、それはほかならぬ「蜻蛉日記」でなければならぬ。日記文学が文学史の上で果たした最も大きい功績は、体験なるものを回想によってとらえ、それを文学の中心に定位させたことだろう。この意味では、「蜻蛉日記」がそうした作品群の根幹の位置にあり、後の多くの作品を生む契機となった点、その功績にははかり知れぬものがあると言ってよいだろう。この「絶望の美学」と言ってもいいほどの「蜻蛉日記」が、一千年に近い過去の世に存在したことは、やはり賛嘆に値すべきであり、日本文学史上揺るぎない高い地位にそびえ立つ存在である。一方平安時代の天才的女性は、小野小町も、伊勢も、清少納言も、和泉式部も、赤染衛門も、その恋愛生活においては不軌奔放であって、近代婦人の範とはしがたい。ただ、かかる浮華軽佻なる女性の多かった時代に、あらゆる誘惑と苦難の中にあって、毅然たる節操を全うしたのは、道綱母と紫式部と菅原孝標女であった。前述した長井氏が自分のそれらの女性に対する評価が、これまでと余り違うので、不審な思いをするかもしれないと言ったが、もちろんそれはものさしの当て方が違うとわたしは思う。このものさしの当て方というのは時代や人の見方によって変わるのである。客観的に見れば、道綱母の結婚生活がかならずしも不幸であるとは限らないが、本人にとってはそれはどうしても不幸な結婚でなければならなかった原因はどこにあるか。一体、道綱母は我々に何を教えようとしているのか。私は二十一世紀を迎えようとしている現代女性の立場として、当時一夫多妻制度下、愛憎

に苦しむ「蜻蛉日記」の中に道綱母の心路軌跡をキャッチしながら、その苦痛の奥底に築き上げた愛憎生活はどういうふうに横たわれているかを掘り下げて究明して行きたい。

(以下の引用本文は、小学館『日本古典文学全集』本によった)

## 一、道綱母が育った環境

人間は性格によって幸福になるか否かが決定されると言われている。道綱母の場合は、性格によって、その結婚生活が大きく影響されたのを否めないが、性格は幼い頃の育った環境から形成される部分が多い。私は道綱母の育った環境からその愛と憎しみの間に潜む深層心理を考察したいと思う。

道綱母は藤原倫寧の娘である。倫寧の文才はとくに高く評価されたことはなかったようであるが、彼の奏状が平安時代の代表的な漢詩文である「本朝文粹」に採録されて今日に残っているところから見ると、学問教養のある「文化人」として、理解してもさしつかえないであろう。渡ってきた官歴を見ると、地方官生活の多かった典型的な受領の階層の人である。

道綱母の兄、肥前守となった理能は同じ受領階級の人の娘と結婚した。この妻の姉妹が有名な随筆作品「枕草子」を書いた清少納言である。「更級日記」の著者は道綱母の姉妹の娘で、即、姪に当る人である。まして、和歌は当時は、単なる芸術ではなく、日常の応答挨拶としての必要品であったから、これらの女流文学者の親族関係から見ると、道綱母の若き日々には当時の女性の三大教養である和歌、書道、音楽にかなり浸透していたと考えられる。当時学問や芸術を好む中流の貴族地方官達の間では、相互に子弟を結婚させたり、娘が上流の女で皇妃となった人たちや、また、皇女に仕えさせるのが流行していた。即ち、中流の家庭に育ちながらも、上流の生活のなかに入らせるのを望んでいたのである。従って、自分の娘を権門の貴公子と結婚させる事によって、己れの一家の栄達を希求していたに違いない。道綱母の父である倫寧のような立場の人は受領階級にもかかわらず、祖先にさかのぼれば摂関家とも同じ名門であるからこそ、人一倍その内心に潜められていた希望があったと察することができよう。幸いなことに、道綱母は教養の深い家庭に恵まれ、しかも女にとって、天からの最大の贈物である美貌も簡単に入手した。

道綱母に関しては、「本朝第一美人三人内也」(「尊卑分脈」)とか、「きはめたる和歌の上手」(「大鏡」)という評判が伝っており、才色兼備の貴女であったというのが実像に近いと思われる。冒頭序文の「いとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人」「か

たちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで」という自虐的とも受け取れそうな自己規定の背後に浮かび上がっているのは、美貌と才気に富む魅惑的な女人像である<sup>(註1)</sup>。

女にとって、美貌と才能の中の一つが天から授けられたら、もうこれ以上喜ばしいことはないと思われるが（勿論、美貌と才能とは比重をどっちに傾けるのか、人によって違うのであるが）、幸福か不幸かはともかく、道綱母は他の女が一生を費してもなかなか手に入らない美貌と才能は生まれた時に手に入った。才能は、と言うと、

嘆きつつひとりぬるよのあくるまはいかに久しきものとかはしる。

これは道綱母が兼家と結婚して二年目の天暦九年に詠じた嘆きの歌である。この著名な和歌は、道綱母没後間もなく『拾遺抄』に採録される。さらに藤原任公は『深窓秘抄』『前十五番歌合』にもこれを収めた。

薪こることはきのふに尽きにしをいざ斧の柄はここに朽たさむ

この歌も「嘆きつつ」と並び、当時道綱母の代表歌として高く評価されていた。題材、感動の奥深さ、表現のしかたでなったこの二首の歌は当時高く評価されていたところに、道綱母の幅広い作歌活動をうかがい知る事ができよう。「蜻蛉日記」には道綱母の短歌百十九首、長歌二首が記録されている。また、藤原任公が道綱母の歌を選んだのも、当時道綱母に対する高い評価、自在に詠歌できる豊かな才能を認めていることがうかがえる。

詠歌に豊かな才能を持っているばかりでなく、手のとても器用な持ち主であったようである。道綱母の許にも、裁縫に関して、相当の技量を持つ侍女がいたらしい（また、道綱母自身も技量を持ち合わせていたか）<sup>(註2)</sup>。「蜻蛉日記」の中には、日常的なことは多く記されていないが、夫の兼家から仕立物の依頼のあったことは何度も述べられている。最初是天徳元年七月、「七月になりて、相撲のころ、古き新しきと、ひとくだりづつひき包みて、『これせさせたまへ』とあり、また天禄三年三月「古き袍『これいとようして』、最後の天延元年「あさましきは、『これして』とて、冬の物あり、」、「つごもりにまた、『これして』となむ」、この年二回も冬物や下襲の仕立てを依頼されている。この年、道綱母の父倫寧は兼家と道綱母との関係の終わりを察したのであろうか、彼女を広幡中川に転居させた。兼家を通してのには不便な土地である。しかし、兼家は構わずに、「冬物」の仕立てを道綱母に依頼してきたのを見ると、必ずしも道綱母のところに手の器用な侍女がいたとは限らないと思われる。なぜなら、最初、衣服の仕立てを依頼されたのは天徳元年（九五七）であり、最後に記述されたのは天延元年（九七三）の二回で、十八年間にわたっているので、必ずしも当時の手並みの侍女がずっと道綱母のそばにいるとは限らない。また、兼家

は衣服の仕立てをしてもらおうと思ったらすぐにすぐれた技量の道綱母のことを思い出すに違いないと理解してもいい。道綱母は詠歌の能力にたけているばかりでなく、裁縫方面も人並すぐれていたと私は確信している。

美貌、和歌、裁縫の各方面は人より一段とぬきんでいる道綱母は、先に述べたように、文化教養の深い人たちに囲まれていたので、古物語、現代語で言えば小説みたいな読物を容易に入手して、いつも手もとにおいて読んでいたはずである。ここに一つ見落してはいけないことは、当時世間に広がっている物語は自分の人生をふりかえって見れば殆ど道綱母の言った「恋愛のそらごと」の話ばかりだったことである。しかしながら、殆ど荒唐無稽な擬人物語や軽佻浮薄な恋愛物語であつたとしても、それらは女たちの心の「つれづれ」の最もよい慰めであつた。道綱母も多くの女性たちとひとしく、いや、人一倍物語に読みふけたことであろう。それら恋愛ごっこばかりの内容を読んでいる間に、知らず知らずのうちに自分も物語の中の主人公になり代わり、自分の将来の甘美な世界をひそかに描き出す。

たとえば男女の恋仲は必ず末長く、変らないことなど、つい信じ込んでしまったのである。そういう思春期の年頃の女性はそんな心情で、自分のプリンスがいつか現られるのを望んでいるのも無理はないことである。即ち、実人生がけっして物語の通りではないということを知らないというわけである。少女は皆誰しも自分の人生の設計図をひそかに心の中でえがくはずだが、深窓育ちの道綱母はその古物語の中のそらごとのような恋愛ストーリーの「毒」を吸い上げた。特に美貌、才能、技量か揃っているのも、自分は必ずずっと夫に大切にされて楽しく幸福いっぱい的人生を送るはずだと信じ込んでいた。「希望は大きかっただけに、失望も大きい」といわれるように、兼家との長い結婚生活は彼女の予想とは裏腹に、夫は次から次へと女性関係が乱れ、この事が彼女の反発を育み、早速石山寺への行動に移った。天禄元年（九七〇）、近江という女の所に通い始めるとのうわさを聞き、つい石山寺への行動に移し、さらに兼家と近江との関係が進み、道綱母の門前を素通りしたのに対して、道綱母はまた二度目の鳴滝般若寺へこもる行動をとったのも、すべて道綱母の文化教養の深さがもたらした自負心の強さである。道綱母の考え方の基盤はあきらかにここにあるというポイントは前もって言っておきたいものである。

ここまで述べてくると、道綱母の性格は浮かび上がってきただろう。勿論、読み取る角度によって、違うかもしれないが、だいたい、聡明で美しい上に、負けずぎらいなところがあり、矜持を高く持っているとか、「ひんやりとさせる顔の冷たい美しさ」、「品とか位と

かいうものを生まれながら持つ女」、「容易ならぬ学と智のある女」など、つまり、理性的で、気品のあるやや冷やかな美人というイメージを与えてくれたのである。

ここに一つ見逃してはいたかったのは、道綱母は「蜻蛉日記」の中に、最初当時のしきたりとして、「もしはなま女などして、言はすることこそあれ」を通らずに、「親とおぼしき人に、たはぶれにもまめやかにもほのめかししに」、「馬にはひ乗りたる人して、うちたたかす」、というしきたりをはずれた方法で言い寄ったのがまず気に入ったわけではないし、寄せてきた手紙を「見れば、紙なども例のやうにもあらず、いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまで悪しければ、いとぞあやしき。」これは「柏木の高きわたり」の兼家に対する最初の印象だった。すばらしく、権門の御曹司のセンスらしくない手紙、内容をもらったわけである。第一印象が悪かったのに、結局道綱母は兼家と一緒にになると決めるまでの心路軌跡は「蜻蛉日記」の中に少しも触れていない。しかし考えれば、当時道綱母の家族は狂喜したに違いない。道綱母自身も貴公子の兼家はまるで古物語の中からおりてきたプリンスが迎えに来てくれると思い、妻子がすでにいるという自分に不利な点は兼家の頭の上ののっていた光環の光にまどわされて、見えなくなってしまった。兼家の「正体」は豪族の一員になろうとしている嬉しさのあまり、考える余裕はなかった。有頂天になった家族全員にきびしい現実の無残さは見えず、これは願ってもない事だと思い、早く成功させるように祈ったはずである。人間は権力を持っている人には弱いわけである。これは道綱母はわざと兼家と一緒にするまで、自分の兼家一辺倒の甘い考えを「蜻蛉日記」に記述するどころか、隠すのも当然であろう。

読者に「見て。私は幸福になるはずの人生は、ひとりの男に台なしにされたよ」という共鳴感呼び起こしたいのに、仮に読者が「当時やめればいいのに」とか、「それは自業自得だろう」と言うならば、その後、兼家との思うに任せぬ愛情生活に悲哀の色も濃くする自分の心境を描いても、説得力が足りない事になりはしないか。こういうわけで、道綱母はその幸福の頂上に立った瞬間の心境にはわざと触れないことにしたのであろう。「蜻蛉日記」はもっぱら悲劇の体験を基調とし、「絶望の美学」という境地を開拓したのである。

世の中にあるすべて最高の条件を揃えている才色兼備、しかも夢を見ている女性である道綱母が、心理、思考、行動すべてにわたって不可解で許容できない人<sup>(注1)</sup>である貴公子の兼家と一緒にするのは、極論を述べれば、うまく行く方がおかしい。失敗は火を見るより明らかである。いわんや道綱母に限らず当時の女性にとっても時代背景を考えてみれば最悪の環境に生きているのであるから、成功する見込みは毛頭ないはずである。(これは後

に述べていきたいと思う)。しかし、道綱母は自分のバラ色の人生はすべて兼家をあてにしたのは「世間知らずの夢見る少女」にすぎないと言えよう。

さだめなく消えかへりつる露よりもそらだのめするわれはなになり

(はかなく消えてしまう露のようだったとおっしゃいますが、そのあてにならぬ露のようなあなたを頼みにさせられている私は、いったい何なの)

これは結婚後一年道綱母が兼家に寄せた恋愛中の女性の感受性がとても豊かな言葉であるが、彼女は無意に言ったことがまさか自分のみじめな人生にぴったりした表現の文句になるとは思わなかったのであろう。人生というものはとても皮肉なものだと認めざると得ない。

## 二、婚姻制度下、手立てのない道綱母

一生、ひどい運命を背負わせられる道綱母は独占欲が強いだけに、一夫多妻が許された制度下、無言にもがくしかできなかつたろう。苦しい立場に立たされても、抗議できなく、尊大でやや倣岸な態度で、デリカシーに欠けるところがあり、移り気の多いつれない男、軽佻浮薄なる男、という夫の兼家に対して、不平不満があっても、恨んでいても、せいぜい消極的に石木と化して黙否するしかできなかつた。つまり、自己の存在喪失の危機感に苛まれ、不安、寂寥にあけくれる生活を送らなければならない主な原因を考えると、道綱母のプライド高い、独占欲の強い性格と当時の婚姻制度との最大限の衝突であると言ってもよかろう。その意味において、道綱母の内心世界の奥底を探る前に当時の婚姻制度はわれわれ現代人として考えられないほどのものか、どんなかたちで存在しているのか、またそんな婚姻制度下、道綱母はどういうふうにもがいているのかを覗いていきたい。

当時の婚姻制度と今日との大きな相違は、

一、一夫多妻が許されていたこと

二、通い婚、つまり夫が妻の家に通うという形で結婚生活が始まること

三、婚姻についての法的手続のないこと

の三点に要約されるであろう。

一はよく一夫多妻制といわれてるが、それは必ずしも正しい言い方ではない。何故ならば、兼家が生きている正暦元年の前後に成立した「落窪物語」では男主人公も女主人公も他の異性にはいっさい関心を寄せない徹底したひとりの夫とひとりの妻の物語になっているのである。その頃、妻はひとりでよいという考えを持つ人もあったことは確かであろう。



ただ貴族達の多くが、それも身分が高くなればなるほど、何人もの妻を持っていたこともまた事実である。むしろ正妻の他にあまたの女性をもつことは、名門の男性であれば当然とされていた。「蜻蛉日記」の書き出しの「あへなかりしすぎごとどものそれはそれとして」とあるのだから、あっけなく終わった恋歌のやりとりなどの経験はあったことになる。そんな彼女にいきなり兼家が縁談を持ってきたのである。しかし兼家の求婚のしかたの非情緒性に夢を踏みにじられたこと、後朝の文をとり交すや、すでに嘆きを訴え、「頼みがたきを頼みせざるをえないこと」などは、もう道綱母の反感をかき立てて、後日のみじめな生活に悪い種をまいたようで、本書の本質にかかわるものと言わねばならない。

しかしながら、兼家の求婚のしかたに道綱母は反発していたが、手続きという上からは非の打ちどころがない。<sup>(注四)</sup>彼女のいうように「案内するたより、もしはなま女などして」思いを告げてくるのであれば「あへなかりしすぎごと」で終わってしまう可能性は多いし、相手がどこまで真剣かもはかりがたい。ある晩こっそり忍んできて、一夜を明かしたとしても、通い続けてくるかどうかは分らない。その点では兼家が誠心誠意であったという表現は確かである。「蜻蛉日記」の求婚についての記述はもっぱら女側の立場から見て、やや気取った表現のように思われる。

現代の目から見ると、兼家の求婚には一つの相違点がある事を無視してはならない。それは兼家には当時すでに時姫という妻があり、子供もいることである。そんな家庭を持つ兼家を道綱母はなぜすんなりと受け入れることにしたのだろうか。当時の社会的慣習からすると、父の倫寧は大臣家の御曹司が二人目の妻を持つのは当然のこととし、あまり気にしなかったどころが、狂喜したからだろう。いくらプライドが高い道綱母と言っても、愛読している物語世界でもよくある話だし、現に父親にも二人の妻がいるのだから、あまり抵抗感はなかったように思われる。これは、一夫多妻という古代的な風習の中に生きねばならぬ女性としての宿命である。

しかし「蜻蛉日記」に、兼家の最初の妻である時姫について何も書いていないのも興味深い。「強いて言えば時姫の方がやや家格が上ということになる」<sup>(注五)</sup>が、本朝三美人のひとりと数えられる美貌にめぐまれ、きわめたる和歌の上手とされた才色兼備の道綱母は、自分の魅力をよく知っていたろうが、当初はあまり気にならなかった時姫の存在、ひいては一夫多妻の許された社会で兼家が愛情を傾けるほかの女性の存在が、綱道母の予想に反して、「蜻蛉日記」の中に書かれている如く、一生涯彼女を苦しめ続けていたのである。

天曆九年八月末に道綱母は唯一の子道綱を出産したが、九月ごろには、その一夫多妻の

風習をよいことにして、兼家は早くも町の小路の女のところに往来していた。

さて、九月ばかりになりて、出でにたるほどに、箱のあるを手まさぐりに開けて見れば、人のもとに遣らむとしける文あり。(上巻六)。

これで、道綱母が兼家に対して漠然と抱いていた悪い予感が的中し、「蜻蛉日記」に道綱母が一番憎んでいた町の小路の女の実在を発見した。さらに町の小路の女は兼家の寵を得て、男子を出産予定の時に、

このときのところに子産むべきほどになりて、よきかたえらびて、ひとつ車にはひ乗りて、一京響きつづけて、いと開きにくきまでのしりて

大騒ぎをして、門前を通って行ったのである。道綱母の怒り、ねだみは無理もない。一夫多妻が許された社会においても、女が夫のほかの妻や愛人に嫉妬せずにはいられないのは人情なのである。いわんや受領階層の娘を権勢家の妻とすることが唯一の階層的上昇の道であったことは、過剰な自分意識の持ち主である道綱母にとっては、強い自尊心は極めて防衛的で、その人一倍の辛さはひしひしと迫ってきたと感じられる。

当時の社会慣習を考えると、女が男の途絶えに神経をたかぶらせ、心の頼りどころが失われようとしている不安感に苦しむ原因のひとつは夫が妻の家に通い、すぐは同居しないということである。それゆえ、いつ兼家が来なくなるか、いつ夫婦の縁が切れてしまうかという危機感を覚える。この時代は婚姻届も離婚届もあるわけではない。結婚のほうはまだ妻問ひから始まり、通ひ始めて三日目の夜の「所頼」という妻の家での祝宴的な儀式もあって、一応のけじめとする。ところが離婚となると、まったくけじめがなく、夫が通ってこなくなれば、夫婦の縁は切れるに等しいことになる。即ち、今朝帰っていった夫は、もう永久に通ってこなくなる可能性が高いわけである。こうした婚姻の継続の認定の不確かさは、女の実不安、危機感を深める一方である。

兼家の妻妾としては町の小路の女ほかに、近江という女など九人いたという。<sup>(146)</sup> そのため起こる道綱母への愛の喪失を意味する夜離れは、存在喪失の危機感を呼び起こして、不安に明け暮れる生活を強いるばかりか、彼女の精神をも不安に突き落としていくのである。この感情が「ものはかなさ」なのであろう<sup>(147)</sup>。

菊田茂男氏「蜻蛉日記の世界」の中で、「『ものはかなさ』は作者の生を根底において支えている一つの『頼り所』を失おうとして、しかもなお他の『頼り所』を得る見通しのない「とにもかくにもつか」ない状態の感情である。換言すれば、それは『頼り所』が失われ、あるいは失われようとする危機の予想による衰減への意識に胚胎する悲嘆、不安、恐

怖、怨恨等の複合感情である」と説明されている。また、清水文雄氏から「ものはかなさ」とは、「自分の生の空虚の意識であり、存在壊滅への恐怖の意識である」と注解されている。<sup>(註八)</sup>「ものはかなさ」という感情は、実にぴったりしたすばらしい分析であると思ふ。道綱母は夜離れがあつても兼家を失つたわけではない、ただ喪失の予感におびえる時に、その極度の緊張の中に生じてくる感情なのだと思う。<sup>(註九)</sup>

道綱母はこのように長期間そういう「ものはかなさ」という感情に揺り動かされ、「かくて数ふれば、夜見ることは三十余日、昼見ることは四十余日になりけり」という時の道綱母の涙ぐましさ、くやしさを親身になって考えると、私は戦慄を覚えずにはいられなかった。

先に述べたように、夫が妻の家に通ひ、すぐには同居しないのは当時の風習である。道綱母の場合は、兼家が病気のとき一晩だけ、兼家邸によばれたことがあるだけで、ついに生涯一緒に暮らすことはなかった。五人の子を持つ時姫にしても、天禄元年の春、兼家が新邸（東三条院とするのが定説だが、？）に移るまでは夫の邸に迎えられた様子はない。当時は夫が妻を自邸に迎える習慣はまだなく、兼家もだれも自邸に迎えなかったとされるが、道綱の母の姉が夫の自邸に迎えられた例もあり、そうとはいいきれない<sup>(註一〇)</sup>。普通言われるように、この新邸移りのときに時姫は迎えられたのであろう。道綱は「われは、思ひしむしろ、かくてもあれかしになりたるなめり」と記す。「結婚十七年目にして、彼女は兼家に迎え取られる望みを断たれたのだが、別な見方をすれば、敗北の予感があったとしても、このときまで、夫と共に暮らせる日を夢見て、期待することができたわけである。道綱一人しか生まなかった道綱の母という事を考えれば五人の子に恵まれた時姫を向こうにまわして、むしろ善戦したというべきであろう。道綱母は長期にわたって兼家の愛情を得ていたのである<sup>(註一一)</sup>という見方がある。しかしながら、女性の心理からすると、ずっと最後まで愛されてきたのなら、いつか必ず迎えにきてくれると期待していたはずである。せめてそれは一種の愛の証だと信じていただろう。ひるがえって、東三条院に迎えられなかったのは、愛されていなかった証拠ではないかと思うことになる。上村悦子氏が、「蜻蛉日記作者、成立、伝本」の中で、道綱母は「蜻蛉日記」執筆の直接の動機の一つとして、「作者が兼家の妻として、時姫と並称される身でありながら、心秘かに期待し切望していた新築の東三条邸に迎え入れられなかったことである」との点を取り上げられている。道綱母は完全に敗北感を喫し、ショックが大きかった事が、執筆の動機につながったのではないかと私は思う。

さて、一夫多妻制下、男性にはとても有利な客観環境において、兼家の身の女性関係はそれぞれどうなったかをそっと見てみよう。

実資の「小石記」には

早朝罷り出づ。寅ノ時女子降誕ス。産ノ間二逢ハズ

馳セ向カフトイヘドモ、産已ニ遂ゲルハンヌ。

と、これは兼家は宿直先の宮中から退出したが、町の小路の女の出産に間に合わなかった無念さが記されている。当時妻の出産に立ち合ったら、血を忌むということから、出産にあうのも穢れで、七日間は穢れを移すので人にも会えず、宮中への出仕もできない。二人は同居していないのだから、庭先での見舞いは穢れなのだが、兼家はあえて穢れに触れた。七日間は町の小路の女の所にいて、そこから「このごろここにわづらはることありて、えまらぬを昨日なむ、たひらかにものせらるめる。穢らひも忌むとてなむ」と道綱母へ便りを出したわけである。町の小路の女は道綱母の始めての出産前後に兼家と関係ができた女であるか、道綱母に一番憎まれていた。そういうわけで、道綱母は「いと胸いたきわざかな」と言って、その便りを受けとったら、「あさましようめづらかなることかぎりなし」と記す。ところで、出産の時、兼家にあんなに大切にされていた町の小路の女は、子供を生んだあと、急速に兼家の寵愛を失い、「産みののしりし子さへ」死んでしまう。その子の法事あたりで兼家の足は絶えたのだらう。町の小路の女は孫王でもあり、「十月つごもりがたに、三夜しきりて見えぬ夜あり」から見ると、妻問いや三日の夜の儀も備えた正式の結婚であろうが、やはり長続きはしなかった。源宰相兼忠女の生まれた子を後年道綱母が養女として兼家に引き合わせた時、「あなかしがまし。御子ぞかし」と知らされた兼家はただ驚き感動の至りの描写から見ると、子を産む前に縁が切られてしまったらしい。道綱母の結婚十七年目ごろから兼家の思い人として登場してくる近江は表面的には兼家の召使であるが故に兼家邸に住んでいる。近江のところに兼家が通い出し、三十日四十夜足が絶えたことによる痛手から逃れようとするのも道綱母の日記執筆の動機の一つの契機となったのである<sup>(注1)</sup>。ほかに源兼忠の娘、藤原中将の娘も、中将の御息所も、保子内親王さえも、ほんの一時的な通いところにすぎなかったのではないか。<sup>(注2)</sup> また一年も二年も足が遠のいていても、いわゆる「中絶え」で、いつ通いが復活するか分からないのだから、関係の終わりはあいまいなのである。

こうして、「蜻蛉日記」に登場する女たちは、みな「はかない」身の上を嘆息しているように見える。妻妾として長期にわたって確然とした地位を保ち得たのは時姫と道綱母だけ

であろう。しかし最終的に最も重きを置かれた兼家の正妻である時姫にしても、安定した夫婦関係が送れていたわけではない。女は男とだけで一つの世界＝家庭を作ろうとする。その世界を男が大切にし、忠実であろうとすればするほど、男が他の女と形を作っている世界は希薄になり、破綻をきたすことになるのである。<sup>(註14)</sup> 近代作家である田山花袋の「蜻蛉日記観」に「殿にとって、女子は尊いものではない」、「女子は生活を面白くしてくれるものだけに思っている」と述べているがこの文章を読むと、兼家像はいつそう明瞭になってくる。自分の栄達土台を固めるために、孫達の異性関係までかなり把握していた兼家は自分の女性関係ははなやいでいても、時姫は彼の正妻であるという存在を肯定しているように見える。世の中は喜新厭旧は男性の常であり、いや人間のつねでもあると言えようか。

### 三、子宝に恵まれず、不利な立場の道綱母

前述したように、一夫多妻が許された社会制度下の男女関係の上で不平等である事は、当時の女性の宿命である。道綱母はややもすれば夫が通ってこなくなるという心の底をむしばむ漠然とした不安、恐怖感を背負っていただけでなく、もう一つ不利な要素もいつも脳裏に去来している。それは子供の多きをもって妻妾の座を尊しとする当時の婚姻形態である。道綱母にとって最大のライバルであった時姫は穏当に兼家の正妻格に位置し、それに道隆、道兼、道長、詮子らの子供をもうけたので、彼女の妻妾としての地位は道綱母よりずっと上であった。

娘を後官に入れ、その腹に皇子を得て、ひいては自分が外祖父となり政権を手に収めようとはかる外戚政治は、一夫多妻の招婿婚制という女性には極めて悲しい制度を産み出した。この制度下において子宝に恵まれない女性は、妻であることだけでなく、その生存事実さえも残らぬことがあったと言われている。

不幸にして、道綱母には道綱が唯一の子供でしかなかった。道綱母は子供の多さが夫との最強の絆であることをよく認識していたに違いない。

さいはひある人のためには、年月見し人も、あまたの子などもたらぬを、  
かくものはかなくて、思ふことのみしげし（上巻十五）

（大勢の子供に恵まれていないので、このように頼りないありさまでは、  
あれこれと思い悩むことばかりが多いのである。）

道綱母は兼家と結婚してすでに十年ほど経っているのだが、子宝に恵まれず、道綱しか

生まれなかった。これを悩みの種とし、精神的にも不安定な様子が垣間見られる。当時子があつての私という女性の不憫さを感じずにはいられなかった。

当時の結婚の形態は前に述べたように、夫婦の間のきずなどというものは子供のほかにはまったくないと言ってもいいほどである。本来、男女の愛というのはもろいもので、時代が変っても今日のわれわれはそれを認めざるを得ない立場である。しかし当時の結婚形態は夫婦のきずながそれほどはかないものだからこそ、親と子のきずなが最も強いものとして浮かび上がってくる。とくに母と子の関係はきわめて安定している。それゆえ「蜻蛉日記」に康保元年（九六四）の初秋には、実母の突然の死に出合うのであるが、その時の彼女の心情を「こはれおくれじおくれじと惑はるるもしるく、いかなるにかあらむ、足手などただすくみにすくみて、絶えいるやうにす」と悲嘆は限りないものとして巧みに記述している。さらに道綱母は「蜻蛉日記」に道綱への母性愛あふれる描写は比重が軽いため、互いの関係が安定を破られるような時でないと、意識されず文学作品になれないと言えよう。換言すれば、心が一つの主題にとらわれ、激しくゆさぶられないと文学作品には昇華しがたいわけで、人生は矛盾で皮肉ということが、私にはとても興味深い。

#### 四、兼家の暗い影で愛憎に苦しむ道綱母

前に述べたように、当時青年政治家として、将来囑望されていた兼家からの求婚は、道綱母にとってはまさに二度とない絶好のチャンスだと思い、少しは躊躇しながらも受け入れた。それは受領階層の娘としては、むしろ玉の輿に乗るようなことであり、さらに、当時の物語を読みふけり、その妻たち、恋人たちのひとりに自分をなぞらえて、その浪漫的な思慕と憧憬を抱いていた道綱母は、兼家をあてにしたわけである。しかしながら、しいて言えば道綱母が描いていた理想的な人生図は現実にはなかった。道綱母が「蜻蛉日記」を書くにあたり、実際に苦しみ連続のみではなく、幸福感に満ち、充実した日々もあったであろう結婚生活を、積極的に「はかない」という作品の基調に統一させた理由は何か。前も述べた如く、「頼り所」が失われ、あるいは失われようとする危機の予想による衰滅への意識に胚胎する悲嘆、不安、恐怖、怨恨などの複合感情である「ものはかなさ」は、道綱母の兼家に対する感情であり、二人の間を「はかなき仲なれば」と見ている。それゆえ、「蜻蛉日記」の中に、「おぼつかなし」、「心細し」、「あやし」、「つれなし」、「辛し」など心苦しい言葉をくりかえし使っていた。「蜻蛉日記」を何回もくり返して読んでいるうちに、道綱母の哀怨の目が私の眼前にはっきりと浮んできた。同時に兼家を非とする発想は確か

に漂っているが、決して女の立場からの抗議でもないし、人道主義の訴えでもない。い万人や社会制度の歪みの分析でもないということに私はやっと気づき始めたのである。即ち、一夫多妻制の批判は取り扱われなかった。「蜻蛉日記」は回想録なので、多かれ少なかれ読者に対する意識が頭をよぎり、(即ち、虚構の問題になるが、そのうちまたとりかかろうと)、書く姿勢を崩したかもしれないが、あるがままの事実をあるがままとして描いていると思う。その中に道綱母の涙、愛憎の苦悩が分るような気がしたのだ。その中には、たしかにひとりの女がもがき苦しむ心情が披瀝されている。千年の歳月を隔てた今、読んでいる私は嘆息を禁じ得ない。

さて、兼家とのはかない不毛の世界を、道綱母はどのように描いているのか。彼女の二十年にわたる結婚生活から、愛憎に苦しむ心情を究明していきたい。

愛憎に苦しむ道綱母が辛さ、不安、寂寥など複合的な感情の網に縛りつけられ、一刻も息抜きできずに、あえいでいたのは、すべて彼女自身の「独占欲」という発想がその原因である。これは私がまず最初に言っておかなければならない事である。即ち、兼家をひとり占めにしようとする欲望が道綱母の「涙ぐむ人生」をもたらしたわけである。もともと道綱母の兼家に対する愛情は激しく強いものであるのも確かであるが、なぜ道綱母の「独占欲」が人一倍強いのかを考えると、単なる兼家に対する愛情が強すぎるからではないと思われる。前篇に述べた育った環境で、自分を物語の中の人物になぞらえたりした上に、美貌の持主で、和歌にたけているすぐれた女性のプライドが高いのは言うまでもない。若年頃から培われた矜持の高さ、自負心の強さなどがどうしても夫の行為を許し得なかったことが第一要因であろうと私は思う。単なる愛情の問題だけではなく、自分の虚栄心が満たされないからである。

愛の占有、即ち夫の愛を独占しようとする道綱母が育った少女時代は、普通天暦文化といわれる国民性と女性崇拝をかかげた文化が広まっていて、この世相的な背景が彼女に影響し、高い芸術的教養と一夫一婦制の深い女性的な自覚をもった人間性を形成していったのではないかという見方<sup>(注上版)</sup>について、私は反対意見を持っている。前に述べたように、道綱母は潔癖な少女であるにしても、愛読している物語世界でもよくある話だし、現に父親にも二人の妻がいるのだから、兼家の二番目の妻になることがそれほど気にならなかったことを「蜻蛉日記」の中の言葉から汲みとる事ができる。もし一夫一婦制に女性の自覚を持っていれば、始めから兼家の求婚を承知するはずはなかった。換言すれば、独占欲を募らせるのは兼家に対する愛情の深さであり、もう一つの原因は自負心の強いことである。

あえて言えば、後者の方がその可能性が高いと言ってもさしつかえがない事を私は強調しておきたい。

結婚してからは、兼家を一日一夜も自分の側から放したくなかったのである。結婚が成立して間もなく、

つごもりがたに、しきりて二夜ばかり見えぬほどばかりある返りごとに、

消えかへり露もまだひぬ袖のうへに、けさはしぐるゝ空もわりなし

引き続き二晩訪れなかった兼家に対し、「死ぬほどの思いで泣き明かした」と訴えている。道綱母の強い自我から出た「独占欲」が窺われる。やがて、道綱を生んで間もなく、町の小路の女の存在が発覚して、道綱母が激憤したがどうにもならない。そして、

嘆きつつひとり寝る夜のあくるまはいかに久しきものとかは知る

この有名な歌を送ったのである。町の小路の女が出産する時、兼家について「ひとつ車にはひ乗りて、一京響きつづけて、いと開きにくきまでののしりて」と道綱母は記述している。町の小路の女の腹に生まれた子供は翌年には早く亡くなってしまった。それに対して、道綱母は「胸はあきたる」と胸がすつとしたと言っている。「蜻蛉日記」の中で、この町の小路の女ほど道綱母の憎しみを受けた者はほかにない。道綱母が道綱を生んで間もないのに、自分より新参の兼家の妾に男の子が生まれたので、ひどく興奮したであろうと思われる。<sup>(1116)</sup>しかし、この時道綱母はまだ二十一、二歳で、しかも新婚期間とも言える間に道綱母が表わした「独占欲」を分析してみると、プライドが高い、自負心が強いというよりも、むしろこの時期は兼家に対する愛情の方がずっと強いと私は思う。しかし、その時道綱母はまだ若くて、ひとりの男の子の美貌の母親であり、夫が別の女のところに心移したのだから、女性の本能のままに反撥的な言葉、態度をとったのである。

道綱母の「独占欲」を述べるとき、「『三十日三十夜はわがもとに』というはむ」という永遠に兼家を独占したい歌を取り上げなければならない。当時道綱母は三十四歳で、「一か月のうち、一日も一夜も欠かさず来て欲しい」というのである。この歌を道綱母の悲願であり本心であるとする説と、彼女は現状に満ち足りて、明るく笑えるほどに心に余裕をもっているのでは、悲願ではないとする説がある。いずれにせよ、確かに年頭の寿歌として、笑いのうちに妹や侍女たちと語り合っているようであるが、現実的に不可能であることを心得ていたように思われる。この時の道綱母は余裕がまたできたわけである。この歌は道綱母の独占欲を一番披瀝される歌として、印象的な歌である。

「蜻蛉日記」の中巻から終りまで道綱母を悩ませたのは近江である。「これらをぞ思ひか



くらむ。近江ぞ、あやしきことなどありて、色めく者なめれば」と近江が初登場したのは天録元年で、道綱母はその噂を聞いて、「ただこのころは、ことごとく、明くれば言ひ、暮るれば嘆きて、……石山に十日ばかりと思ひ立つ」、石山寺に十日ほど物詣することを決めた。さらに兼家と近江との関係が進み、「おはしますおはします」といひつづくるを、一日のやうにもこそあれ、かたはらいたしと思ひつつ、さすがに胸走りするを、近くなれば、ここなるをのこども、中門おし開きて、ひざまづきてくるに」、また、「いと近ければ今宵さりともとこころみむと、人知れず思ふ。車の音ごとに胸つぶる」、さらに、「あさましき人、わが門より例のきらぎらしう追ひちらして、渡る日あり」、兼家が一度ならず道綱母の門前を素通りしたので、道綱母は自分を感情揺さぶられて、つい読者の反感を買った「鳴滝般若寺へ立ち」という身勝手な行動をとった。ここでは、「さすがに胸走りする」、「車の音ごとに胸つぶる」を取り上げて探って見よう。

「おいでです、おいでです」と侍女たちがしきりに言うけれど、このあいだのようなことになったら困る、心苦しくつらいことだと思いながら、それでもやっぱり胸が(ときめいていた)」、「すぐ近くなので、今夜はいくらなんでも来はしないか様子を見てしようと、心ひそかに思う。車の音がするたびに、胸がどきどきする」と道綱母は夫に別の女ができた後、また今夜くるかどうか、期待と不安にかられながら待ちわびている。しかも車の音が聞こえてくると侍女たちが「おいでです、おいでです」と騒ぎ立てている時、道綱母は胸がときめき、どきどきする様子を生き生きと描写している。でも自分の門前を夫の車が素通りし、結局背を向けられた。その一喜一憂の様を巧みに表現している事を私はじかに感じとったのである。しかし、ここで描かれている緊張感は勿論兼家に対する未練が残っているし、「独占欲」を前提として表した感情であることを認める。ただし、その独占欲の中に、兼家に対する未練、愛情はまだどのぐらい占めているかということになる。むしろ、プライドが高い、自負心が強いという面が圧倒的に占めているのではなかろうか。要するに、抑えきれない緊張感を盛り上げるということは道綱母と兼家との間ではあたかも「隠れん坊」のようなゲームになったりして、自分が勝利を勝ちとるかどうかに結果が出るまでに生じた緊張感の高い感情であろう。道綱母は夫に無視されるごとに自分の魅力に対する否定を感じ、自尊心を傷つけられたに違いない。まして、侍女たちの前で、女性として最大の屈辱を受けるかどうかということばかり気にとられて生まれた緊張感だと思う。兼家に対する愛情はこういう緊張感と比べれば、比重をそれほど占めていないではなかったか。

それゆえに、兼家から思いとどまるように返事が来たが、道綱母は何も構わずに、急いで鳴滝般若寺へ出立したのである。この「独占欲」は非常に強いものである。その時期道

網母はもう三十五、六歳で兼家に対してまだあつあつという情熱を多少なくしていた。独占欲を根ざしているものは、自負心が強いだけに、痛手も大きいという心の傷の度合いが道綱母にとっては、どうしても夫の行為を許せなかった原因であろう。

「車の音ごとに胸つぶる」と待っていたのに、兼家はとうとうまた道綱母の門前を素通りした。そして二日ほど経って兼家自身が訪れて、

「あさましと思ふに、うらもなくたはぶるれば、いとねたさに、ここの月ごろ念じつることをいふに、いかなるものと、絶えていらへもなくて、寝たるさましたり。聞き聞きて寝たるが、うちおどろくさまにて、『いづら、はや寝たまへる』と言ひ笑ひて、人わろげなるまでもあれど、石木のごとして明かしつれば、つとめて、ものも言はで帰りぬ。」

道綱母はすねたような反抗で、自分の感情に素直とは言えない態度をとるのである。面とむかった時に、素直な気持になれずにすねるのは、きわめて自然に出してしまう態度で、感情を傷つけられた女性の愛の変容である。つまり、自分の独占欲が満たされないと知れば、たちまち石木と化して黙否のうちにジワジワと兼家の愛情不足を責めてくる。

「蜻蛉日記」を読んでいると道綱母は兼家にとって、かわいい妻ではなかったであろう。まったく衝動的に、供人も連れず寺へ行ったりもして、身のまわりの人に説得されても、意地をはって、下山しようとしなかった。兼家は「いと恐ろしき気色に怖ちてなむ」（なんとも恐ろしいあなたの様子を気おくれして）と言ったのも何回もあった。兼家に対する愛情よりも道綱母にとっては自分のプライドを守った方が大事だと思われる。

道綱母は自らの理想の姿に反して、苦悩だらけの生活を背負わせた兼家の不適当な行為を非難し、自分の正しさを強調するというのはごく一般の見方である。しかし彼女の冷淡で可愛げのない態度の裏にある嫉妬心や独占欲を隠そうとする虚栄心が燃えているのを見逃してはいけない。男女の間の激しい愛情は、かえって相手を疲れさせてしまう。また、感情的に走りすぎれば、相手を非、自分を是という発想の狭い愛情観のがんじがらめで、自分が身動きのとれない状態に陥ってしまい、相手も遠のいてしまうことになるに違いない。道綱母が本当に兼家を愛しているならば、許すことができ、ずっとあんなそっけない態度を取らないはずである。すすんで包容力を持って接すべきだ。男女の間にいかにスペースを保つかは愛情を成功させるポイントとよく言われ、その上、見慣れ見あきてきた人のほかに、新しい存在を求めるのは男の常とも言われている。残念ながら、道綱母はあくまでもその道理が分からなかったようである。もしかすると、分からないわけではなかった。道綱母は自分の自画像を強調する時に単なる悲哀、苦悩などのはかない感情に悩む姿だけではなく、不遇意識を強く持つほど自分のプライド高い自画像がもっとはっきりと浮

き彫りになるという発想からではなかろうか。さらに道綱母は愛する男を自分から奪う女はすべて敵と考えても、自分がその女の敵であるとは考えていないようだ。自分がすぐれた女性だし、世間並みの女性ではないという意識に立って見下しているように思われる。

「私のような人の手から夫を奪った女を絶対に許せない」というイメージもキヤッチできると思う。ただし、町の小路の女にひどい言葉で殴ったが、兼忠女の出現に対してはそれほど神経を高ぶらせなかった。多分町の小路の女の存在によって、もたらされた免疫的心情だったのであろう。つまり、道綱母は自分以後の兼家の相手にはかなり反撥的態度をとっているが、自分以前からの相手（時姫）には妥協的、同情的な態度をもって、接した心理も面白く思いながら、「蜻蛉日記」を読んだのである。プライドの高いことについては、道綱母の階級的感情の強烈さを言わなければならない。この階級の感情は即ち上流婦人独特の感覚であり、それが生得のものでないだけによく表わしている。道綱母は受領階級の娘だけで、それが結婚によって、上流貴族になり、生来の個人的な優越感情と新しく彼女の属した階級の持つ感情とが融合して、このような性格を作り上げた。<sup>(注17)</sup> とくに兼家と争いが出た時に下人に対する言葉、発想はついプライド高いフノビズム（成り上り根性）をもらしているのである。

近代作家の堀辰雄氏と室生犀星氏は道綱母に「清純な女性像」と「厄介な、男性にとって手にすえないこわい女」の姿をそれぞれ描き出していると言っている。たで食う虫も好き好きと言っても、男性の立場から言うと、道綱母のような女を妻にする勇気のある男性はめったにないだろう。それは男の甘え心—もしかすると幾分、母性複合心理に悩まされていたかもしれない兼家のやさしい心—の差し伸ばす手に、いきなり冷水を浴せかけるような女である。<sup>(注18)</sup> しかもそうしたやり方は、彼女独自の愛の表現にすぎない。男性の読者は「蜻蛉日記」を読んでいると、きっと兼家に同情して、兼家の言い分も聞きたくなるだろう。「蜻蛉日記」は完全に当時の貴族の男性の現実生活とロマンチックな女性の気分との典型的な背反として、生き方の対立の作品である。しいて言えば、あくまでも繊細な趣味の世界に生きる女性とやや粗暴とも言えるような男性との結婚生活によって、相互の無理解による食いちがいである。また、兼家は政治闘争にあけくれたので、毎日物語めいた男女の愛情に気を配ることがないと想像できよう。「蜻蛉日記」の道綱母はなぜ悲劇のヒロインを演じたかと言うと、自分が夫に理解されないだけでなく、自分の方でも男女の間のきびしい現実や愛情のはかなさを理解することができなかったという二重性の誤解を兼ねた上に、かけ離れた精神生活を追い求めようとする男女は、互いにだんだん遠のいていく宿命にあると言えよう。

いずれにせよ、「煩惱多き女」道綱母の姿、「永遠に恋する女の姿」は、私達の目の前に生き生きと現れている。そういう姿に、「愛されることはできても自ら愛することを知らない」男に執拗なほど愛を求めつづけて、その求むべからざるを身にしみて知るに及んではせめて自分がこれほど苦しめられたという事だけでも男に分からせようとし、それにもついに絶望して、自らの苦しみそのものの中に一種の慰を求めるに至る、不幸な女である」と中村真一郎氏が述べている<sup>(註19)</sup>。

また、「堀辰雄の文学と蜻蛉日記」の中で、「日記の作者が兼家の不誠実な冷たさのために、長い間にかみじめた苦しみがいつか身についてしまい、その苦しみをむしろ『いとしく』思い、その『苦しみがなければ一層はかなく』さえ思うようになった。それは『命の糧にも等しいほどな』ものになった。それを自分に苦しみを与えてくれている当人は少しも気づいていない」と堀辰雄氏が説明されている。心と裏腹の態度ばかりを取ってしまう道綱母について、こういうとつぴな見方もあるのは「なるほど」と私は感動しながら、「蜻蛉日記」を楽しんでいた。

年をとるにつれて、当時結婚の様態や、自分のプライドを維持するため、あんなずるい夫には手の打つところがないと道綱母はやっと分かるようになり、結局、消極的に神仏への帰依によって宗教的救済にすぎる道を選んだようである。しかしながら、天禄元年の参籠や長精進は、常に現実と宗教の二者択一という躊躇の段階であり、明らかに現実苦よりの一時的な逃避にすぎない。無論、それも兼家の愛や昔二人がねんごろになった思い出をもう一度再現したくて、行動に移ったことである。

天禄三年、道綱母が三十七歳ほどになった正月には、

今年は天下に憎き人ありとも、思ひ嘆かじなど、しめりて思へば、いと心やすしと安定した心境を示している。

その明るい気分は宗教世界への途上において、自分が発見した道綱への母性愛と、それに伴う兼家への愛情の新しい姿勢に由来するものと思われる。<sup>(註20)</sup> 即ち、愛の対象が兼家にひたむくことをやめ、その喪失感を乗り越える新たな愛の方向へ転移した。換言すれば、愛されようとする受動的なものではなく、自ら進んで道綱母や夫を愛そうとする能動的な性質をもつものである。それは返しの愛を期待しない愛である。愛されたいという執拗な受動的立場から、安らかな気分になり始めるのである。<sup>(註21)</sup> 今まで精神的に縛られていた夜離れに目を離し、求め得ざる愛への諦観が芽ばえたのである。この意味において、道綱母は勇敢に崩壊する現実を凝視することができ、兼家をひとり占めにすることが人生

の全部ではなく、兼家の妻としての生き方は、生き方のうちのひとつにすぎなく、これから自分のために自分の人生を大切にしていくなべきだという新しい認識を持つようになったのである。

さらに、道綱母は老後の生活を考え、兼家と妾の兼忠女との間にできた女の子を養女として、迎えとることができたことを考えると、兼家を始め、兼家の妻妾たちを暖かく寛大に扱うことができたことを物語っている。視野を広げほほえんで人生を凝視するもうひとりの道綱母が現われ、新しい世界が道綱母の前に大きく展開されたのである。

## 終りに

「蜻蛉日記」の全篇が涙もろさや病的な感傷的気分によって終始するものであるとか、あまりのプライドの高さで、王朝の才女と言われる人たちの人気投票でもすれば、道綱母は下位に置かれるだろう。始めて読んでいた時、私もそう感じたが、何回も読むことによってこの本を閉じようとする今では、道綱母の姿は大きな修正を受けるに至った。道綱母の己れの魂に対する観察眼の返しに、私は同じく女性の立場として彼女の涙のかげに読者のわれわれには何かを教えようとしている本当の意図をキャッチした気がしのだ。

「蜻蛉日記」は断じていい加減に目を通す本ではないと私は思う。「蜻蛉日記」は、女が愛する男の愛情を求め続ける執着心によって、一生を愛憎にさいなまれた代償を支払ったことを示している。その中にひそんでいる強靱さに感心し、最後になって、愛憎の淵から浮かびあがり、その深淵を見おろすことができた真の大人に成長したことは感服の至りである。

この日記は理解し合えない男女の戦争という世の中に永遠に絶えない主題を取り上げている。千年ほど前におきた事は、今でもわれわれの身の辺のどこかにおきている。当時の婚姻制度は今日のわれわれにはとても考えられないほど違ったかたちで存在していたが、二十一世紀を迎えようとしている今日では、婚姻制度は法的な保障があったとしても、愛情への保障はどこにも求められないのが現状である。愛憎にさいなまれる女の心の動きは、（即ち、喜、怒、哀、楽）千年前の女性であっても、今日の女性であっても、千年後の女性であっても、ほぼ同様と言っても過言ではない。しいて言えば女である以上、誰しも男女の戦争から出た嫉妬心や独占欲という愛憎の感情から逃れられないだろう。今、私も身の辺の友達から千年ほど前の道綱母の面影を感じ取ったのである。

道綱母が手前勝手に夫の無理解を訴えているとしても、「蜻蛉日記」はいかに無理解であ

るか、鮮かに表現し、表現自体が時に筆者の意図を脱け出して独立した人間像を作り出すために、おそらく私たちは道綱母自身が充分に見えていなかった点まで、見るようになる。<sup>(註1)</sup> 道綱母はその体験を客観化し、勇敢に己れの魂に対する観察眼を持ち、さらに課せられた運命を超えていくために、「文学」へと解決の方向を見い出した。「蜻蛉日記」を読んで、私は人生というものの複雑なやりきれなさをつくづくと思い知らされるのである。われわれが文学作品に心を引かれる原因はここにあるのではなかろうか。

私も「蜻蛉日記」に教わったことがある。それは道綱母の夫に対する愛情への執着ということである。

物への執着、地位や名誉への執着。人間関係をめぐる執着。人生の悲劇の多くは、そうした執着によって起こるものと言えよう。仏教では、それらの執着を断ち切るためには、「諦観」という概念を説くのである。「諦観」の本義は、いわゆる世間で言う「あきらめる」とか、「仕方がないと放棄する」ことではない。それは本来、「諦（あきら）かに観（み）る」ということで「真実を見極めていく」ことなどを意味する言葉である。つまり、なぜ自分が執着しているのか、なぜとらわれているのか、その自分自身の心の内面を客観的に掘りさげ、みつめていくことである。即ち、気にとらわれていると大事件のように見えても、実際は大した問題ではない場合がよくある。心残り、未練と言つても過去に恋々と執着したままでは何の解決もない。自分が生きる活力が失われてしまうばかりでなく、身の廻りの人にまで迷惑を掛けてしまう。大切なことは、その実相を「あきらかにみていく」ことである。そして毅然と乗り越えていくことである。そうするならば、自分自身の知恵と勇気で、未練という心の残像にはとらわれない自分を発見できるだろう。最後の段階になるが、道綱母は貴重な人生を費して、やっと諦観の境地に至るようになったが、私はこの「蜻蛉日記」を通して、一つの教訓として執着心という未練がましい感情にこだわらないことを学んだ。まして、これまで女性の身にはめられていた枷はもうすっかり取り払われ、自由に羽ばたける社会に与えられた今日の女性は男女の間の未練がましい執着心、そして、世の中の萬物への執着心にとらわれず、常に前向きの姿勢で、自由に楽しく生きていくべきだと教えられたのである。これこそこの「蜻蛉日記」が、「絶望の美学」として価値ある文学作品と断言できる存在理由である。

## 注

注一：道綱母の自画像、石坂妙子

注二：作者の属性、伊藤博

注三：「道綱母の兼家観―「あやし」「あさまし」を中心に」山形女子短期大学紀要第一集、昭和 54. 3

注四：平安日記文学に描かれた家族のきずな、森田兼吉

注五：「蜻蛉日記」作者、右大将道綱母、増田繁夫（昭和 58、新典社）

注六：同注五

注七：「蜻蛉日記」に見られる作者の生き方について、保澤奈津

注八：同注七

注九：同注七

注十：「平安鎌倉室町家族の研究」（昭和 60 図書刊行令）

注十一：平安日記文学に描かれた家族のきずな、森田兼吉

注十二：同注七

注十三：同注四

注十四：同注四

注十五：同注七

注十六：蜻蛉日記と周辺の人たち、今井卓爾

注十七：王朝文学の世界、新潮社、中村真一郎

注十八：同注十七

注十九：同注十七

注二十：平安朝日記 I、蜻蛉日記の世界、有精堂、菊田茂男

注二十一：同注二十

注二十二：同注十七

## 参考文献

1. 土佐日記・蜻蛉日記、日本古典文学全集、小学館、1973 年
2. 女流日記文学とは何か、女流日記文学講座第一巻、勉誠社、石原昭平編集、平成 3 年
3. 蜻蛉日記、女流日記文学講座第二巻、勉誠社、石原昭平編集、平成 2 年
4. 道綱母、有精堂、岡一男、1970 年
5. 道綱母の自画像、石坂妙子
6. 「蜻蛉日記」に見られる作者の生き方について、保澤奈津

7. 平安日記文学に描かれた家族のきずな、森田兼吉
8. 「蜻蛉日記」は“私小説”か、国文学 解釈と鑑賞 43 巻 9 号、野村精一、1978 年
9. 王朝文学の世界、新潮社、中村真一郎、昭和 38 年
10. 蜻蛉日記、日本の古典文学 1、有精堂、1981 年
11. 平安朝日記 I、日本文学研究資料叢書、有精堂、1971 年
12. 日記文学の世界、国文学 解釈と鑑賞、今井卓爾、昭和 41 年